

慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	『本朝続文粹』と『本朝無題詩』
Sub Title	
Author	佐藤, 道生(Sato, Michio)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1989
Jtitle	三田國文 No.12 (1989. 12) ,p.10- 14
JaLC DOI	10.14991/002.19891200-0010
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19891200-0010

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

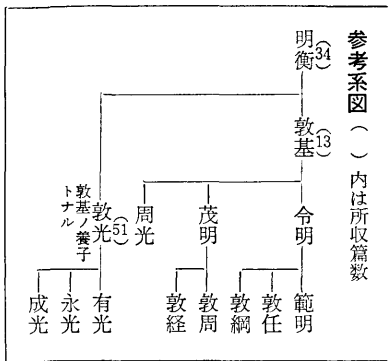
『本朝統文粹』と『本朝無題詩』

佐藤 道生

『本朝統文粹』の現存通行本が未定稿であることは、山岸徳平氏が作者表記の不統一を理由に指摘（『本朝續文粹解説』 昭33・1）して以来、ほぼ定説となつてゐる。しかし、どのような事情から草稿段階の本文が流布したのかという点については未だ議論がなされてゐないようである。以下、この点につき些か私見を述べてみたい。

『本朝統文粹』は、藤原明衡の編纂による『本朝文粹』の後を襲い、院政期に成立した模範例文集である。後一条朝の寛仁二年（一一一八）から崇徳朝の保延六年（一一四〇）までの代表的な文章およそ二百三十篇を収める。本書の編纂は従つて保延六年以降に行なわれたことになるが、所収作者を物故者に限るといふ『本朝文粹』の編纂方針に本書も倣つたとすれば、最も年代的に下る作者、藤原敦光（天養元年没）・藤原資光・菅原宣忠（後二者は没年未詳。敦光より一世代ほど若い）の没後ということになる。後白河朝から二条期にかけて（保元から長寛まで）の頃と考へるのが妥当であらう。

編者は未詳である。しかし、所収作者が藤原式家に偏つてゐることからすれば、やはり式家の儒者によるものであり、明衡の孫に当たる有光、永光、成光のあたりが編者として最も有力と思われる。さて、『統文粹』は、『文粹』の統編という意識の下に編纂されたにも拘らず、『文粹』の十四卷に対して、『統文粹』の現存本は十三巻の体裁を有してゐる。両者の内容を比較すると、所収作品数は、『統文粹』は『文粹』四百二十余篇の約半数であるが、収める文体の種類はほぼ同じである。両者の最も大きな相違は、『文粹』では詩序が四卷（卷八～十一）に亘つて収められてゐるのに対して、『統文粹』では三卷（卷八～十）と、一卷少なく割り当てられてゐる点である。これを今少し細かく対照させたのが左表であ



本朝文粹	卷八(詩序一)	卷九(詩序二)	卷十(詩序三)	卷十一(詩序四)
天象 時節 山水	天象 時節 山水	帝道 人倫 人事 祖餞 論文 居處 別業 布帛 燈火	聖廟 法會 山寺 木	草 鳥
天象 時節 ×	天象 時節 ×	詠史 居處 ×	廟社 法會 ×	草 鳥
本朝統文粹	卷八(詩序上)	卷九(詩序中)	卷十(詩序下)	

△×は上に対応する部門が見られないことを示す。

両者を比較すると、部門とその排列は凡そ一致しているが、『文粹』に見られる「山水」「祖餞」「山寺」といった重要な部門が『統文粹』には欠けている。中でも「山寺」の詩序が見られないのは極

めて不審である。

平安時代も後期になると、儒者文人を取りまく政治的状況は愈々敵酷となり、高位高官への道は全く閉ざれてしまっていた。中下級の文人貴族たちは、庇護者たる上級貴族に扈從して、その別業を訪れたり、或は同じ境遇にある同朋たちと共に京都郊外に散在する寺院を遊覧して、その場で詩筵を開き、「言志」詩、「即事」詩を賦すことによつて自らの不遇を慰め、ひとときの心の安らぎを得ていた。当時の公家日記を繙けば、山寺への散策がいかに頻繁に行なわれていたかは明白である。

次に掲げるのは『中右記』嘉保三年(一〇九六)三月十三日条である。當時正四位下、右中弁で三十五歳の藤原宗忠は、前々からの約束があったので、源成宗、藤原基俊、藤原敦宗、平時範らを語らつて円融院へ花見に行くことにした。

午時許りに円融院南廊に行きて残花を見る。時に仏閣漸くに荒れ、禅庭に花残る。懐旧の涙自らに行衣を濡す。人々、一絶句を賦せんが爲に、題・無題を食議するの間、天景漸くに傾き、已に申時に及ぶ。無題を賦す可きの由、議し了んぬる間、右京権大夫敦基朝臣、同舍弟図書助教敦光、給料令明来会す。人々感歎し、手宮破子を披きて聊か以て盃酌す。月前に詩成る。之れを講ずるに図書助を以て講師と爲す。各以て優美なり。前金吾の詩頗る華麗か。深更に及びて帰浴す。(原漢文)

この時の敦基、敦宗、敦光、基俊の詩は『本朝無題詩』山寺部に見られる。

こうした山寺に於ける詩筵が飛躍的な増大を見せたのであるから、実用に供する文章を集めるといふ目的を持った『本朝統文粹』

の詩序部には、「山寺」の部門が設けられていて然るべきであろう。⁽¹⁾ 事実『統文粹』には、例えば当時の和歌会の盛行に呼応して、和歌序が十八篇と、文粹の十一篇に比してかなりの増加を見せて収められるなど、平安中期から後期にかけての文体の需要度の増減変化を如実に反映した箇所が見られる。

『統文粹』の通行本が草稿段階にあることは冒頭に記したが、如上の理由から、具体的に言えば通行本に「山寺」などの詩序がつけ加えられてはじめて定稿本となるものではなかったか、と想像されるのである。

このような推測については、通行本の十三巻に対して、『本朝書籍目録』には「統文粹 十四巻」とあることや、醍醐寺所蔵の『統文粹』の抜萃本（願文部のみ）に「巻十四」の表示があることから、その可能性がある程度認められるであろう。⁽²⁾ そして、ここに定稿本に向けての一巻分の増加を想定するならば、それは詩序の部であり、詩序という文体の中では山寺に於けるものの需要が当時是最も多かったことから、通行本巻八の「法会」の次に巻九として一巻分「山寺」の部門が立てられ、以下一巻ずつ巻次がずれたものと考えられる。

それでは何故「山寺」の詩序が『統文粹』編纂の過程に於て後まで収録されず、集外に留め置かれたのであろうか。稿者はこれを、『統文粹』と時を同じくして行なわれた『本朝無題詩』の編纂作業と深く関わるものであったと考えたい。

二

『本朝無題詩』は平安後期の詩人三十名の「無題」の詩七百七十

余首を収めた漢詩集である。「無題」とは、漢字五字から成る「句題」に対する語で、五字以外の詩題を意味するが、内容的にみると、句題詩が題意に沿って典型的表現に終始する向きがあるのに比して、無題詩は「言志」「即事」を内容とするもので、詩人にとってはかなり自由な物言いが可能となる。平安後期の詩人たちが連れだって京都郊外の寺院を遊覧し、詩筵を催すことによって平素の憂さを忘れようとしていたことは前に述べた。『本朝無題詩』にはそうした折のものが極めて多く見られる。書中「山寺」の部門には、十巻本で言えば巻八、九、十の三巻（約二百六十首）が当てられ、さらに他の部門（四季、花下、月前など）にもそうした場での詠作が含まれているので、合計すれば山寺に於ける詩は全体の半数以上を占めるのである。

本書の編纂時期は、その編纂下命者と目される藤原忠通を集中では「法性寺入道殿下」と表記するところから、忠通の出家した応保二年（一一六二）六月以降、薨じた長寛二年（一一六四）二月以前と考えられる。そして直接編纂作業に携った者としては、作者及び入集数の点で藤原式家とその縁故者に偏りがあることから、式家の儒者であろうと思われる。敦光（六十四首入集）の男、有光、永光、成光、或は茂明（四十六首入集）の男、敦周、敦経あたりが有力である。

即ち『本朝無題詩』と『本朝統文粹』とは、その編纂時期がほぼ一致し、しかも編纂者には共通（或は同一）の人物が想定されるのである。

さて、『本朝無題詩』の現存本は三巻本と十巻本の二系統に大きく分かれる。両者は外見上、

① 卷序を異にする。

② 十巻本の方が三巻本より十二首ほど多い。

③ 書名を三巻本では欠くか或は「無題詩」とするが、十巻本では「本朝無題詩」とする。

などの点で異なるが、一方、『本朝書籍目録』には「本朝無題詩十二巻」と著録され、これは現存本のどちらの系統とも巻数の上で相違する。それでは現存本とこの鎌倉期には存在していたと思われる十二巻本とは一体どのような関係にあるのか。これについて稿者は前稿に於いて、十二巻本を定稿本と想定する立場から、現存二系統の本文を『本朝無題詩』編纂過程に於ける二種類の草稿本であると位置づけ、両系統の本文異同から、十巻本が三巻本の修訂を経たものである、と考察した。

『本朝無題詩』の現存本が草稿段階に止まるものであると考えられる理由としては第一に、「読書」「贈答」などの、無題の詩の総集として立てられて然るべき部門が見られないこと。第二に、詩の排列に推敲が加えられていない箇所が見られること等が挙げられる。そして、さらに重視すべきは、現存本に詩序が一篇も収録されていない点である。

本書に先行する漢詩の総集には『扶桑集』『本朝麗藻』が現存するが、孰れも集中には詩とともに詩序を収めている。詩序はその詩（或は詩群）の詠作事情を叙述するものであり、とくに無題の詩のように人事を内容とするものである場合、読者にとって詩序が必要不可欠となることは言うまでもない。『本朝無題詩』の現存本に詩序が全く見られないことは、これが草稿段階にあることを示す明徴であろう。

藤原式家は、類聚を家業とすることによって紀伝道に勢力を伸長した儒家であった。その一つの業績として、明衡の代から綿々と収集し続けてきた詩会資料を用いて、敦光は大治年間（一一二六—一一三一）頃に『中右記部類紙背漢詩集』（仮称）を編纂した⁽⁴⁾。これは現存部分から推測するに、寛弘から大治に至るまでに催された詩会の詩を網羅的に集めたものである。従って、これが『本朝無題詩』（天喜から保元までの詩を収める）の重要な依拠資料となったことは確実である。そして、『中右記部類紙背漢詩集』編纂の際に詩群から切り離された詩序をも式家では類聚していたに相違なく、この詩序の集大成を『本朝無題詩』の編纂時に編者が活用できなかったはずはない。

以上のように、草稿の十巻本から定稿本へと進む『本朝無題詩』編纂の最終段階には、部門として「読書」「贈答」などを加え、詩の排列を整え、詩序を該当する詩群に挿入してゆく作業が行なわれた（或は行なわれる予定であった）と想像される。この中で最も煩雑な作業は言うまでもなく詩序の挿入であり、その大半は山寺に於ける詩筵の詩序であった。

結語

さて、ここで先に提起した問題——『本朝統文粹』の通行本には何故「山寺」の詩序が見られないのか——に立ち戻りたい。

『本朝統文粹』と『本朝無題詩』とは同じ藤原式家の儒者によって、しかも長寛年間前後という、全く同じ時期に編纂が企てられた。両者は片や実用例文集、片や漢詩集と、互いに性質の異なる書物であったから、その編纂作業は同時平行して行なわれることが可

能であるように思われた。ところが、山寺に於ける詩会の詩序を双方ともに収めなければならぬという唯だ一点で、両者はその作業が重なり合うこととなった。これこそが『本朝続文粹』の通行本の詩序部に「山寺」の部門が見られないという不備の生じた事情であったと思われる。そこには、依拠資料を『本朝続文粹』と『本朝無題詩』のどちらに優先させて使用するかという実務上の問題もあつたであろう。しかし、それよりも編者自身が山寺に於ける詩序の有用性を認識し、また、『本朝無題詩』に入集させる作品との兼合いを考えつつ、歴大な資料からどれを模範的な文章として選抜するか、という点に腐心したことが『続文粹』への入集を遅らせる原因となつたのではないか。そして、『本朝続文粹』は山寺の詩序を欠いた草稿本の状態のまま余りにも長く停滞していたため、その不全本文が図らずも世に流布してしまつたのではなからうか。

注

- 1 『新撰朗詠集』（藤原基俊撰。大治・長承頃成立）の「山寺」の部門には十二首の長句詩句が収められている。これに対して、前代の『和漢朗詠集』の同部門には七首が見られるのみである。両書の同一部門に於ける摘句数が全体に一、二首の増減にとどまる中であつて、この五首の増加は極めて特徴的であり、院政期における「山寺」の意義を自ずと示すものであろう。
- 2 山崎誠氏は、『本朝続文粹』（国文学 解釈と鑑賞 第53巻第3号 88・3 至文堂）に於いて、醍醐寺所蔵本の存在から十四巻本が定稿本である可能性を指摘し、その一巻分の増補に奏状（巻七）と牒、都状、定文など（巻十二）とが想定できるとした。
- 3 拙稿『本朝無題詩』伝本考』（和漢比較文学 第5号 89・11）を参照されたい。
- 4 拙稿『詩序集』成立考』（国語と国文学 第62巻第12号 85・12）を参照されたい。

〔附記〕

本稿は、第37回慶応義塾国文学研究会（89・6・17）に於ける同題の口頭発表の一部である。席上、御示教を賜つた檜谷昭彦先生、池田利夫先生、川村晃生先生、川上新一郎先生に厚く御礼を申し上げる。

（まとう みちお）